

学位論文要旨

音楽学習における音楽活動にみる〈知る〉に関する研究

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 教科教育学分野  
音楽文化教育学領域

D171811 辻 勇介

# I 論文の構成

## 序章 本研究の背景と目的

### 第1節 問題提起と追究の方向性

第1項 「知識」の不明瞭性

第2項 活動との関係性

第3項 追究の方向性

### 第2節 「知識」に関する見解

第1項 客観的「知識」に基づく見解

第2項 教育目標分類にみる認知科学的「知識」の見解

第3項 音楽活動にかかわる見解

### 第3節 目的と方法

第1項 目的

第2項 方法

## 第1章 「知識」の再検討

### 第1節 「知識」の構築

第1項 宇佐美寛による「知識」観

第2項 「知識」と《覚える》

第3項 「知識」の構築にかかる過程

### 第2節 《思考する》と「知識」

第1項 論弁的シンボル体系

第2項 現示的シンボル体系

第3項 音楽学習における〈知る〉への示唆

第4項 《思考する》の内実

第5項 行為と行動

第6項 《思考する》と「知識」

### 第3節 デルタイの認識論

第1項 精神科学と「知識」

第2項 理解と解釈

第3項 認識

第4項 解釈と言語

第5項 体験を構成する行動と行為

第 6 項 まとめと示唆

第 4 節 体験か経験か

第 1 項 経験と体験

第 2 項 〈感ずる〉

第 3 項 経験的位置づけとしての音楽の体験

第 4 項 現示的シンボル体系と経験の関係にみる示唆

第 5 項 音楽の享受とフォルム

第 5 節 小括 a

第 2 章 音楽学習における「知識」の再検討

第 1 節 ハンスリックの形式主義的立場にみる「知識」

第 1 項 形式主義

第 2 項 形式主義にみる感情

第 3 項 観照

第 2 節 リーマーの表現形にみる「知識」

第 1 項 洞察

第 2 項 現示的シンボルの観点

第 3 項 表現形

第 4 項 知覚と反応

第 3 節 美的経験の視点

第 1 項 一つの経験

第 2 項 美的経験にみる知性的な面

第 4 節 考察 b

第 3 章 音楽学習における「知りかた」と〈知る〉

第 1 節 音楽学習における「知識」

第 1 項 「知識」に関する用法

第 2 項 「知識」の措定への疑問

第 2 節 音楽学習における〈知る〉

第 1 項 「なじみの知識」

第 2 項 「知りかた」の遂行にみる〈知る〉

第 3 節 考察 c

第 1 項 〈納得する〉

第2項 「方向づけを行う知識」

第3項 〈知る〉の内実

第4項 〈知る〉を視野に入れた音楽学習に向けて

#### 第4節 考察 d

第1項 音楽学習における目的の設定

第2項 〈知る〉の可能性の判断

第3項 音楽学習における〈知る〉

### 第4章 音楽学習における「知識」と〈知る〉

第1節 「知識」と〈知る〉

第2節 〈知る〉の指標

第3節 経験を見据える音楽学習

### 第5章 実践例にみる〈知る〉

第1節 分析の手法と視点

第1項 エスノグラフィー

第2項 分析の視点

第3項 観察する授業実践

第2節 分析と考察

第1項 行為どうしの関係性

第2項 行為にみる複数の行動の共通性

第3項 《思考する》が示す「方向づけを行う知識」

第4項 「なじみの知識」と行為の関係性

第5項 〈感ずる〉の可能性

第3節 〈知る〉の所在

### 終章 本研究の成果と課題

第1節 まとめ

第2節 成果と意義

第3節 課題

### 文献

## Ⅱ 各章の概要

### 序章 本研究の背景と目的

教科的な学習における「知識」というとき、それは学習者が教師から教えられ、共通に知ることができる事実や方法といったいわば固定化されたものを指すことが多くある。音楽学習においても、音符や音楽用語、音楽史、歌い方や奏法などといった「知識」に区分しうるものがある。音楽学習においてそうした「知識」を学ぶことができるとき、学習者はその学習を通して「知っている」と証言できるようになる。ただしその証言からは、その学習においてたとえば特に教師が意図した「知識」を学んだかどうかを決定づけることができない。不可視である音楽とかかわって何をどのようにとらえるのかを完全に特定することはできず、そうしたとらえられるものについては常に一定程度学習者側に依存するからである。すなわち「知っている」という証言に通ずる音楽学習における「知識」に関する内実を明らかにすることは重要な課題の一つである。

音楽学習では音楽活動を実施する場面がほとんど必須といえる。種々の音楽活動は、各音楽学習において前提的なものとして扱われ、それがその音楽学習の主体となることも多い。そのように音楽学習では音楽活動を実施する場面が特に前面に現れるが、そのとき音楽活動と「知識」の両者の関係性はどのようにとらえられるだろうか。一般的に言って、活動と「知識」の両者は、「知識」として知ったことを活動に生かすという構図で成り立っているとされる場合が多い。ただし音楽活動の実施では、「知識」を習得して活動に生かすという一般的な構図にとどまらない。たとえば音程について知らなくても感覚的に周りとの音高をあわせていくことができる。あるいは作曲者の心情を反映するといった情意面に着目するとき、結果的に「元気よく」などというふう結論づけられると、学習者なりの元気のよさを反映して歌える。また音楽上の記号が実際にどのような効果をもたらすのかは、音楽活動によってわかる。するとそこには、音楽活動を前提とする「知識」に関する多様性が現れる。すなわち、音楽学習特有の「知りかた」が存するのではないかと考えられるのである。そうであるならば、「知識」や「知りかた」自体が何であるかというところから追究する必要があるであろう。本研究は、音楽活動を通じた新たな「知りかた」を提示することから、「知識」を知ることとは別のありかたがあると考えられる、音楽学習における〈知る〉ということがいかなるものかを明瞭にすることを目的とする。なお本研究の音楽学習とは、学校教育にとどまらず、あらゆる場面で音楽とかかわって何らかを学ぶことをいうのであり、それにより学習者というときも、発達段階や音楽的能力に差がある幅広い範囲を包摂していることになる。このように考えることによって、本研究があらゆる音楽学習の場に適用できるものであることを示すことにつながる。そして本研究における哲学的・美学的考察は、たしかに学校教育に限らない音楽学習を含んで述べることができるものである。

本研究は、上述のとおり主に哲学的・美学的見地から展開する。また実践例を踏まえてその妥

当性を示す。

## 第1章 「知識」の再検討

本章では、「知識」としてひろく認められてきた客観的「知識」の見方に対して、宇佐美寛(1934-)やG・ライル(Ryle, Gilbert 1900-1976)の言語主義批判の立場から「知識」を再考した。ここでは「知識」に関する非言語的な部分と「頭の中」での種々の《思考する》が見出され、学習者が言語と体験と種々の《思考する》をあわせてそれぞれに「知識」を構築することが明らかとなった。その際の種々の《思考する》には、《関連づける》のほか、《実験的にものをいう》およびそれに付随する《失敗する》と《成功する》、《目新しい状況において役立たせる》が見出された。これとかかわって、S・K・ランガー(Langer, Susanne K. 1985-1985)の論弁的シンボル体系では、言語が何らかの対象についての概念を学習者に運び、そこから学習者は対象に関してそれぞれに表象するとされ、このことは学習者がそれぞれに「知識」を構築することに結びつけられた。またW・ディルタイ(Dilthey, Wilhelm 1833-1911)の精神科学的立場からは、生の連関のなかで生の分節化が起こるところにおいて、体験と認識が不可分であることと、自然科学にない「方向づけを行う知識」が存すること、言語的な解釈によってものごとの本質がわかることが示され、それは「知識」の構築に必要とされる要素と関係づけながら説明された。さらに森有正によって体験と経験の区別がなされ、体験は人間が先行し、直接提示が可能なもの、経験は人間に先行し、人間を定義し、回顧的にのみそれがあったとわかるものであるとされる。それは経験が予期しない〈感ずる〉事態となって現れることを示すのであって、ここで音楽の不可視の特性を踏まえるとき、音楽は常に事態的に現れるものとなる意味で、音楽の体験は経験性を有することが明らかとなった。加えて音楽が言語というよりも感じるという体験によってその本質をとらえうると考えるとき、言語的な「知識」に対する、音楽学習における「知識」に関する特有性が浮かび上がるのである。

## 第2章 音楽学習における「知識」の再検討

ここでは、音楽美学と美的経験の見地から、ランガーの現示性を踏まえつつ、音楽活動に必要な音楽そのものに焦点をあわせて、音楽学習における「知識」を検討した。E・ハンスリック(Hanslick, Eduard 1825-1904)は形式主義的立場から音楽美学を展開した。ハンスリックは理念としての感情を認めるものの、一貫して音形式としての音楽を主張し、純粹観照を求める姿勢をとった。B・リーマー(Reimer, Bennet 1932-2013)は「主観的現実」と呼ばれる感情にかかわって、洞察することを重視した。リーマーは、洞察は美的知覚を通して美的に反応することによって起こり、そのとき感情の経験を受け取ると述べた。この洞察は、ランガーのいうシンボル体系のうち、言語の領域で表せない感情とかかわって述べられる現示的シンボル体系へと通ずるので

あり、そこで音楽が特に感情の形式に近いとされることから、音楽の体験が経験性を有する可能性を高める。加えてJ・デューイ（Dewey, John 1859-1952）は「知的」、「実践的」、「感情的」の3つの面からみることができ一つの経験について述べ、感情的な面を前面に出す芸術の分野の経験によって、それら3点を包摂した一つの経験になるとした。これらのことから、音楽学習における音楽活動では、言語的側面に本質性を見出すとされた「知識」にかわり、体験や経験、感情といった言語外の面に本質性が見出されることを明らかにし、音楽活動のなかで観照や洞察、特に感情や経験とかかわる洞察をする方法が求められることを示唆した。

### 第3章 音楽学習における「知りかた」と〈知る〉

第1章と第2章を踏まえ、音楽学習において既述のような一般的な「知識」を措定することを疑問視し、「知りかた」と〈知る〉を提示した。音楽はその本質性に言語外の感情が深く関与するのであり、また音楽が言語のように見るができないことから、言語的、一般的な「知識」の構築とは区別されると考えられる。I・シェフラー（Scheffler, Israel 1923-2014）の「知識」の用法においては、ものごとや方法について構築される「知識」が「いきつく知識」として表される一方、洞察にはそのための方法というものがないことが示された。音楽活動において洞察の方法をもって何らかの「知識」を構築するというようなことではなく、音楽活動の遂行があるときに洞察という事態をひき起こすのである。C・プラメリッジ（Plummeridge, Charles 1939-）が、音楽学習とかかわって、音楽活動のなかに学習者自身は何らかを見つけることができることとあわせて考えるとき、「知識」を構築して知るという、音楽活動における「知識」という図式にかかわって、音楽活動のなかにある「知識」という図式がみえてくる。

ここで、洞察するための方法がないとされるなか、音楽学習での「知識」は何かと問うとき、音楽を体験することによる《感じる》およびそれによる〈納得する〉とかかわった、L. A. Reid (Reid, Louis A. 1895-1986) の「なじみの知識」が、これから次第に明瞭になっていくものとしての音楽学習における「知識」といえることが明らかとなった。またその学習者それぞれの「なじみの知識」にはじまる〈納得する〉の内実を明瞭にしようと前進していくところには、学習者それぞれの前進に向けた「方向づけを行う知識」が存し、それは音楽学習において《思考する》に位置づくものであることもわかった。そうして何らかの前進があるところとは、「いきつく知識」とは異なる、音楽学習の〈知る〉があるところなのである。

そうして、経験や感情といった要素を含めた音楽学習における特有の「知りかた」の遂行と〈知る〉を明らかにした。〈知る〉とはすなわち、学習者それぞれの「方向づけを行う知識」を用いた、曖昧から明瞭への前進であり、また、方法がないとされた事態としての洞察（〈感ずる〉と呼称できる感情の経験）である。経験として人間を定義することに通ずる洞察も、学習者が学習者自身を開被する意味で〈知る〉なのである。これら〈知る〉は、学習者それぞれの音楽活動のどこか

にありうることから、音楽活動とは「知りかた」の遂行であるということが出来る。音楽学習における「知りかた」としての音楽活動の遂行上に、〈知る〉が期待される。

具体的に、音楽学習とかかわっては、経験を見据え、経験に必要とされる回顧を加味した、「領域」を目的とする新たな音楽学習の展開を示した。回顧という要素を音楽学習に見出すために、各音楽学習におけるふり返りが、その1回の音楽学習に限定されて断片的にならないようにする。つまり「領域」を目的とした長期的な音楽学習を設定することによって、結果的に経験に要する回顧の範囲を拡張するのである。「領域」を目的にするときには、ある音楽学習をつくるというより、経験になるための回顧の範囲を拡張する一連の音楽学習をつくるということが重要になる。ある1回の音楽学習において常に「領域」的目的の深化を見据えるのである。

#### 第4章 音楽学習における「知識」と〈知る〉

第3章までに明らかとなった、音楽学習における「知識」と〈知る〉を再整理し、第三者からみた学習者の〈知る〉を認める指標と、経験を見据えて回顧の要素を加味した「領域」を目的とする音楽学習の展開を示した。

一般的な「知識」とは、「いきつく知識」として説明された。「頭の中」での《思考する》が働き、それによってランガーのいう論弁的シンボル体系と結びつく「知識」は構築される。対して〈知る〉は、音楽とかかわって一般的な「知識」の構築とは別に提示されたものであり、「知りかた」の遂行（音楽活動）のなかに現れる事態であって、学習者の曖昧から明瞭への何らかの前進、あるいは洞察として述べられる。

学習者の〈知る〉の存在を認めるためには、「知りかた」の遂行上においてたしかに学習者の《思考する》があることからいって、「知識」の構築にも要された種々の《思考する》を判断指標にすることができる。ただし音楽はその体験によって直接的に（洞察を含む）〈知る〉を見出しうることから、ここではさらに《感じる》、《なじむ》、《覚える》を挙げ、指標に加えた。その際、「知りかた」の遂行からみえてきた〈納得する〉や〈感ずる〉という事態があることもあわせて示しておいた。このように、《思考する》から拡張して、音楽に焦点化するなかでみえてきたいくつかの指標が挙げられた。およそ〈知る〉というのは、ただ1通りの答えがないことに決着をつけようとするのではなく、明瞭へと前進するなかで曖昧であったものの内実を浮かび上がらせることである。あるいは学習者自身だけでは知られなかった学習者の領域を開被することである。つまり〈知る〉がそれぞれの学習者にとっての音楽学習としての充足を担うのであって、「楽しい」という言表に何らかの曖昧から明瞭への前進としての〈知る〉があるか、「楽しい」という言表を超えた感情の〈知る〉があるかによって、音楽的な学習として音楽にかかわることができたかが決まってくる。種々の指標が認められるような音楽活動があるところに、音楽を学習することの意義はあるのである。



## 第5章 実践例にみる〈知る〉

本章において実践例を取り上げる際には、「知識」の構築や音楽の体験、経験を検討するなかに見出された、《思考する》や《感じる》、〈納得する〉、〈知る〉、〈感ずる〉などといったものが、どのような音楽活動にみられるのかを、学習者の行動に着目して、分析的に考察した。その際、本研究に即した実践ではなく、普段から実施されている通常の実践を取り上げることで、本研究で提示した〈知る〉が多くの実践のなかに現れうることを示唆した。

なお分析にあたっては、本研究において提示した〈知る〉とかがかわって、あらかじめ、①行為どうしの関係性、②行為にみる複数の行動の共通性、③《思考する》が示す「方向づけを行う知識」、④「なじみの知識」と行為の関係性、⑤〈感ずる〉の可能性、という5つの視点を設定した。結果的に、5つの視点のいずれも実践例のなかにみることができた。

ある音楽学習をその都度繰り返すことは必要であるにしても、そこで完結する断片的な音楽活動とするのではなく、「領域」を目的にし、経験を見据えて、さまざまな音楽活動や指導事項、教材を用いた音楽学習によって回顧の範囲を拡張することで、学習者それぞれの〈感ずる〉を含めた〈知る〉の可能性は高められる。

## 終章 本研究の成果と課題

「知識」自体をあらためて問うことを通して、音楽学習に必須の音楽活動にみる〈知る〉を提示した。本研究によって、音楽学習での「知りかた」の遂行上において音楽活動と〈知る〉は二分化されることなく、たとえば「楽しい」といった情意的な面にとどまらない、よりたしかな音楽の学習が展開されることが期待できると考える。加えて、「芸術」として完成された音楽の体験から、経験としての〈感ずる〉事態を現すことができたとき、さらに音楽学習は意義的なものとなるであろう。すでに完成している音楽をもって経験になるとき、そうした「芸術」はよりいっそう深く学習者に価値づけられるものとなるのである。

音楽学習における「知りかた」の遂行とその上での〈知る〉とは、「領域」を目的とするところにおいて、感情の経験としての〈感ずる〉を包摂した、学習者それぞれの前進を指し示す。こうした音楽学習における「知識」にかわる〈知る〉を、ひろく一般に展開される通常音楽学習を踏まえて提示できたことは、本研究の成果であると考えられる。

今後の追究すべき点は、ある限定的な期間にみる音楽学習の設定についてである。つまり〈感ずる〉を視野に、回顧の範囲を拡張して長期的に音楽学習を考えるとときに、そのなかの各音楽学習をどう設定し、結びつけていくのかということである。音楽の体験が経験性を有するといふとき、回顧を念頭に置いた音楽学習における音楽活動をさらに模索することが重要である。

### Ⅲ 主要引用・参考文献

#### (和文文献)

- デューイ,J./河村望訳 (1995) 『デューイ＝ミード著作集 3 人間性と行為』人間の科学社
- デューイ,J./河村望訳 (2003) 『デューイ＝ミード著作集 12 経験としての芸術』人間の科学社
- ディルタイ,W./大野篤一郎他訳 (2003) 『ディルタイ全集第3巻』法政大学出版局
- ハンスリック,E./渡辺護訳 (1960) 『音楽美論』岩波書店
- ランガー,S.K./矢野萬里他訳 (1960) 『シンボルの哲学』岩波書店
- ランガー,S.K./池上保太他訳 (1967) 『芸術とは何か』岩波新書
- ランガー,S.K./大久保直幹他訳 (1971) 『感情と形式』太陽社
- ランガー,S.K./塚本利明他訳 (1974) 『哲学的素描』法政大学出版局
- 森有正 (1977) 『経験と思想』岩波書店
- 森有正 (1978a) 『森有正全集第2巻』筑摩書房
- 森有正 (1978b) 『森有正全集第3巻』筑摩書房
- 森有正 (1978c) 『森有正全集第4巻』筑摩書房
- 森有正 (1979) 『森有正全集第12巻』筑摩書房
- プラメリッジ,C./丸林実千代訳 (1995) 『音楽教育の理論と実践』音楽之友社
- リーマー,B./丸山忠璋訳 (1987) 『音楽教育の哲学』音楽之友社
- ライル,G./坂本百大他訳 (1987) 『心の概念』みすず書房
- ライル,G./坂本百大他訳 (1997) 『思考について』みすず書房
- シェフラー,I./村井実他訳 (1987) 『教育から見た知識の条件』東洋館出版社
- 宇佐美寛 (1973) 『思考指導の論理』明治図書
- 宇佐美寛 (1978) 『授業にとって「理論」とは何か』明治図書

#### (海外文献)

- Dewey, John (1958) *Art as experience*. New York: Capricorn Books.
- Langer, Susanne K. (1953) *Feeling And Form: a Theory of Art Developed from Philosophy in a New Key*. New York, Charles Scribner's Sons.
- Langer, Susanne K. (1957) *Philosophy in a new key: a study in the symbolism of reason, rite, and art*. Cambridge: Harvard University Press.
- Reid, Louis A. (1962) *Philosophy and Education: an introduction*. London: Heinemann.
- Reid, Louis A. (1969) *Meaning in the Arts*. London: Allen and Unwin.
- Ryle, Gilbert (1979) *On thinking*. Oxford: B. Blackwell.
- Ryle, Gilbert (1990) *The concept of mind*. Harmondsworth: Penguin.
- Reimer, Bennett (1970) *A philosophy of music education*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall.